

忘れられた アフガニスタン

“解放”という虚像 “食えない”現実 ——中村哲さんが語る、アフガンのいま

アフガニスタンという辺境の地で、無医地区の診療に携わるかたわら、井戸や灌漑用水路の建設にも取り組む、ペシャワール会現地代表の中村哲さん。アフガン空爆以降、再び忘れ去られようとしているアフガニスタンの現実を語る。



・プロフィール・ 中村哲（なかむら・てつ）

1946年、福岡市生まれ。九州大学医学部卒。国内の診療所勤務を経て、84年パキスタン北西辺境州のペシャワールに赴任。以来、ハンセン病を中心としたアフガン難民の診療に携わる。ペシャワール会現地代表、PMS（ペシャワール会医療サービス）総院長。20年にわたる活動が評価され、03年にはラモン・マグサイサイ賞（平和・国際理解部門）、今年9月には宮沢賢治イーハトーブ賞を受賞した。著書に『医者井戸を掘る』（石風社）、『辺境で診る 辺境から見る』（石風社）、『空爆と「復興」』（石風社）など多数。



地球温暖化、雪山消失が 大規模な難民を生んでいる

空爆時に一躍有名になったタリバン政権が崩壊して3年余り。今年10月にはアメリカの肝いりで大統領選挙が行われ、復興途上にあるとされるアフガニスタン。だが、現地で医師として長年活動している中村哲さんは、「アフガニスタンでは、いろいろな自由が解放されました。ケシを栽培する自由、売春をする自由」と指摘し数える。なかでもタリバン政権時代、皆無に等しかったケシ栽培は急激な増加をみせ、現在ではアフガン産のヘロインが世界市場の4分の3を占めるなど、世界最大の麻薬供給国のひとつに数えられるようになった。

また、解放直後の報道では、人権抑圧の象徴とされたブルカを女性たちが脱ぐシーンがたびたびテレビに映し出されたが、現在、近代化が進む首都カブールの街中でさえ、ブルカを脱いでいる女性を見つけることは難しい。「アフガン女性にとって、ブルカはもともと伝統的な外出着。だから、タリバンがいなくなっても、女性がブルカを脱がないのは当然です。ブルカは当時、米英軍の空爆を正当化するための世論づくりとして利用されただけなんです」と語る。

中村さんがペシャワールの地に赴いたのは、1984年。当時、発足した「らい（ハンセン病）根絶5カ年計画」のスタッフとして参加、現地でハンセン病棟の指揮を執るのが中村さんの任務だった。ところが、そこで目にしたのは、絶対的に不足するベッド数や折れ曲がったピンセット。ガーゼの消毒に至っては、レンジで熱して煙が出る瞬間に取り出すというありさまだった。このため、中村さんは診療所の建設に着手し、86年からはハンセン病のみならず、マラリアや結核、デング熱といった多くの伝染病に対応する診療を始めた。

空爆の下で100万人が 餓死に直面していた

現在では、パキスタン・アフガニスタンにまたがる山岳地帯の無医地区で医療職員100人が働き、1病院と4診療所で年間15万人前後を診療する。また、大千ばつが進行した2000年からは飲料水確保事業として、井戸や灌漑水路の建設にも着手。完成井戸は1200ヶ所を越え、現在、全長14kmに及ぶ灌漑水路の建設途上にある。

だが、そんな活動の一方で、中村さんが20年間にわたって見てきたアフガンの現実は悲惨なものである。「豊かなものはますます豊かになり、貧しいものはますます貧しくなる」と話す。なかでも9・11同時多発テロの報復から始まったアフガン空爆は、中村さんにとって忘れがたい経験となった。

当時、すでにアフガンでは大千ばつが進行していた。多くの難民が発生し、世界保健機関（WHO）の発表によると、アフガンの人口およそ2000万人のうち、実に4分の1に当たる500万人が飢餓線上で苦しみ、餓死に直面する者が1000万人にも達していた。当初、中村さんらは、「これだけひどい状況が世界に知られないはずはない。そのうち大きな国際援助が駆けつけるはずだから、それまでわれわれが頑張ろうと考えていた」と言う。ところが、時を経ずしてやってきたのは国連による制裁措置。当初は食料の供給まで完全に断られた。中村さんは当時の憤りを、こう語る。「100万人の人が生死の境を彷徨っている時に、食料を断つということが、何

を意味するのか。険しい山々に囲まれたアフガンの冬の厳しさを少しでも知っている人であれば、あの時期に空爆を始めることがいかに犯罪的な行為か、わかっていたはずだ」

空爆のさなか、ペシャワール会は総勢30人、4グループの決死隊を募り、首都カブールへの食糧供給を急いだ。結果、計1800トンの小麦と食用油などを届け、10数万人を冬の飢餓から救ったが、一方で決死隊がカブールで見たものは、そこら中に点在する女性や子供、お年寄りの死体だった。「もともと比較的裕福といわれるカブールの人々は、すでに約8割が国外に脱出していました。空爆の下にいたのは、大千ばつで行き場を失った国内避難民たちでした」

私たちは、お金や暴力と いう信仰から自由だ

現地の人々の目線に立ち、協同で支援するペシャワール会の活動は、「国際支援」や「国際貢献」とは意を異にする。中村さんは「私たちの活動は地域支援そのもの」と言い切る。「私たちは全世界を救うことはできません。まして正義の味方になって、軍隊まで出して世界を救おうなんて思いもしない。それよりも私たちが会っていく状況の中で、問題の一つひとつにどう答えていくか。一隅を照らすことで、見えてくるものがある」と話す。

活動を広く紹介していく中で、アフガンの子供たちの明るさにつ

いて、たびたび聞かれることがある。実際、子供たちは餓死の寸前まで明るい。募金集めのために悲惨な写真を撮ろうとしても、なかなか思うように撮れないのが現実だ。「現地で



ラディンを拘束できず、世界各地でアメリカの「テロとの闘い」を疑問視する声も強まりつつある。先頃行われたアメリカ大統領選ではアメリカ

カ国民の判断も真つ二つに分かれた。そもそも国際社会がこぞって制裁措置を加え、爆撃を与えたアフガン空爆とは何だったのか。アフガンの現実、今も私たちに重い課題をつきつけている。

⑧ (稗田和博)

中村さんは、活動を通じて、人間にとって本当に必要なものは何なのか、捨ててしまつて構わないものは何なのかを学んだ、という。

「今、世界中を動かしている一つの迷信は、金さえあればなんとかなる、経済さえ好転すればなんとかなる、政治力があればなんとかなる、戦争をして強さを誇示すればなんとかなる、といったものです。しかし、私たちはそうしてお金や暴力という信仰から自由です」

アフガン史上初の直接投票による大統領選は、アメリカを後ろ盾とするハミド・カルザイ氏（前暫定政権大統領）が55%を得票し、当選を確定している。だが、首都のカブールをひとたび離れると、地元の部族勢力が群雄割拠し、部族間の抗争や「反アメリカ」を旗印にした不穏な動きなど、新たな火種を抱えているのがアフガンの現実である。一方で、アフガン侵攻から3年経った今も9・11同時多発テロの首謀者とされるビン